

スウェーデン 環境ニュース

2001年 1月号 ページ1 / 3

今月号は動物や人間の死に関わる色々な課題の紹介をしており、新年第1号には不適切とお感じになられる方もいらっしゃるかもしれませんが、どうかご容赦下さい。

レーナ・リンダール

肉食を巡る議論が盛り上がる

普段私たちが食べている肉はどこから来て、それらの動物はどのように飼われ、運ばれ、と殺されているかを考えたことがありますか。スウェーデン人は真剣に考えているようです。

この1月にスウェーデンに行ってきたのですが、先月号で報告したヨーラン・パーション (Göran Persson) 首相の「肉食に疑問」発言が波紋を呼び、メディアで様々な議論が取り上げられていました。スウェーデンでは80年代、家畜の飼育方法を巡って議論が大きく盛り上がったことがあります。その結果、世界的に厳しいと言われる動物保護法ができたのです。現在議論が新たに盛り上がっている理由にはいくつかあり、大きな理由の一つが牛肉の安全性に疑問をもたらした狂牛病の発生です。他に、動物の権利に対する若者の高い関心、一部の過激な抗議行動、それに関連した食習慣の変化などがあります。また、EUの自由貿易拡大による食肉用家畜の国際取引の増加も一因です。売買される動物は、飼育所からと殺所まで、生きたまま長距離を運ばれるようになりました。動物にとってこの運搬は苦痛が伴う事が多いものです。

現在、スウェーデンの市場で輸入肉が増えていきます。消費者は、それらの肉類がどのように生産されたかに目を向けるようになりました。比較的高い動物保護の基準をもつスウェーデンは、今年1月からEUの議長国になりました。スウェーデンに期待している人たちは、これをきっかけにし、EUの動物保護規制が守られていない現状に対して何らかの対策を取るよう自分たちの主張を強めています。

若者に歓迎された首相の 「肉食に疑問」発言

パーション首相は、1月6日、ラジオ放送のインタビュー番組 (P1, Ekot) 中に改めて肉食に対する疑問を表明しました。この理由について、狂牛病はあまり関係なく、自分が食べるために動物が殺され苦しんでいることを考えるようになったからだと言明していました。動物からの食べ物を一切摂らないベガン主義 (00年10月号参照) の若者の考え方にも理解を示しました。ベガン主義の若者は1月19日、首相を訪問し、海草で作られた「偽もののキャビア」など、ベガン食品をプレゼントしました。パーション首相は30分間ほど、試食したり若者の意見に耳を傾けたりしました。5万人の会員で構成される市民団体、「動物の権利協会」事務局から同行したカタリーナ・クロング (Chatarina Krångh) さんのコメントによると、首相の関心は真剣なものという印象を受けたそうです。

首相は社民党の党首ですが、2万人の会員と全国組織を持つ社民党の青年部も首相の発言をきっかけに政府に提案をしました。すべての中学校と高等学校の給食で、ベガン食メニューが選べるようにすべきだというものです。多くの学校はすでにベジタリアン向けのメニューを提供していますが、乳製品も食べないベガン主義者にとっては不十分だと青年部は主張しています。

日本から見れば、肉食を巡る議論は極めて少数派の感心ごとと捉えられるかもしれませんが、今年1月9日のダーゲンス・ニーヘテル紙によると、スウェーデン国民の5%が肉を食べないベジタリアンだそうです。一方で、スウェーデン人の一人当たりの肉消費量は大幅に増える傾向にあります。

ダーゲンス・ニーヘテル紙の分析によると、社民党がベガン運動などの非主流派運動に前向きな姿勢を示すのには、政治的な狙いがあると言います。政党から一線を引いた若者の政治意識が高まろうとしている現在、社民党は、対立するよりも柔軟な対応をしたほうが過激な運動の歯止めになるということ、70年代ベトナム反戦運動時代から学んだのではと同紙が分析しています。

(ベガン・ストックホルム協会プレスリリース 01/01/19、動物の権利協会 Djurens Rätt のHP、社民党青年部 SSU のプレスリリース 01/01/15、DN 紙 01/01/09、その他) つづく

スウェーデン環境ニュース

2001年 1月号 ページ2 / 3

1ページからつづく

「長靴下のピッピ」の著者が 動物保護のパイオニア

80年代の動物保護議論に火を付けたのは、「長靴下のピッピ」などで世界的に有名な児童文学作家のアストリッド・リンドグレン（Astrid Lindgren）女史でした。リンドグレンさんは農場育ちで、ユーモア溢れる魅力的な田舎生活を描いた子供の本を何冊も世に送り出しています。今年93歳になったリンドグレンさんは、相変わらずスウェーデン国民に非常に愛されている人物です。

リンドグレンさんは85年、首相の公式別荘ハーブスンド（Harpesund）で飼われている乳牛が一年中牛小屋に入れられ、野外に出る機会が一切ないことを知りました。これは当時、大規模な牛乳生産施設によくある状況でした。リンドグレンさんはスウェーデン最大のダーゲンス・ニーヘテル紙に抗議の投稿記事を書きました。それを機に始まった議論の結果、厳しい動物保護法ができ、その法律は「リンドグレン法」と呼ばれることもあります。数年に渡る議論の中でリンドグレンさんは、首相や農業相と何回も手紙のやり取りをしました。いつもユーモア調であった抗議文書は、国民の高い支持を得ました。これらの手紙のやり取りや、リンドグレンさんの抗議行動の経緯を面白くまとめた本もあります。「私の牛は遊びたい」（アストリッド・リンドグレン／クリスティーナ・フォシュルンド著）という本です。（Astrid från Vimmerby, Lena Törnqvist著の本）

牛の耳に黄色い札

スウェーデンの田舎を夏に旅行すると必ず牛が見えます。スウェーデンがEUに加盟してから、牛の耳に整理番号の書いた黄色い札が付けられるようになりました。97年から義務になっています。子供の頃、それぞれ名前が付いた親戚の乳牛に、愛着をもって仲良くしていた私にとって、この黄色い札は時代の変化を象徴するものの一つです。牛一頭一頭

がEUの巨大制度の一要素になりました。書類がファイルに整理されるのと似たように牛も整理されるようになりました。生き物が官僚主義にはまったことに対する違和感があります。

しかし、黄色い札は消費者に情報提供するためのものです。狂牛病発生でおきた牛肉に対する消費者の不安から、EUはスーパーで販売される牛肉の生産元が分かるような制度を作りました。黄色い札は制度の前提条件です。

EU内で販売される牛肉は00年9月1日から、牛がと殺された国およびと殺所の番号、肉が加工された国と加工場の番号、そして整理番号を明記するラベリングが義務化されました。02年1月からはさらに、牛が生まれた国、育った国も追加されます。このラベリングは肉の質について一切関係ありません。

（食肉業界情報会社Svensk Köttinformation）

と殺所の内部が注目される

1月8日、動物の権利を主張する団体が秘密で撮影したベルギーのと殺所の内部の映像がニュース番組アクチュエルト（Aktuellt）で放送されました。動物が叩かれるなど、EUの動物保護規制に反する残酷な行為が映っていました。EUのデビッド・バーン（David Byrne）保健・消費者保護担当委員が1月にスウェーデンを訪問した際、スウェーデンのマルガレータ・ウィーンベリユ（Margareta Winberg）農相と一緒にベルギーのと殺所の映像を見ました。それぞれが映像を見てショックを受けたことを伝え、対策の必要性を訴えました。スウェーデンの獣医協会は「スウェーデンは違う」と主張していますが、スウェーデンの動物愛好家は「スウェーデンも似たような状況がある」と主張し、対立が続いています。

と殺所の在り方に関心を持ち、スウェーデンの状況の方が良いと判断する人は、新しいラベリング制度を頼りにし、例えばベルギーでと殺された牛の肉を買わないという選択ができるようになりました。と殺場内部での動物の扱い方が、肉の売れ行きに関係するような市場ができています。その後、映像を秘密裏に入手し公表したベルギーの動物保護団体「Gaia」の指導者に対し、家畜業界から暗殺の脅迫があるという報道があります。

メディアはさらに議論を盛り上げようとしています。アフトンプラデーット夕刊紙は、1月11日の一面に、リンドグレン女史を筆頭にして、と殺場に關

つづく

スウェーデン環境ニュース

2001年 1月号 ページ3 / 3

2ページからつづく

連した動物の残酷な扱いに抗議するバーン委員宛の手紙への署名を呼び掛けました。

(DN紙01/01/10, Lantbruk紙01/01/19, Aftonbladet紙01/01/11)

と殺所のメディアへの対応は様々です。動物権利運動で槍玉にあげられると殺所は、施設内の取材を拒否する方針を選んでいきます。逆にメディアを歓迎するオープンな態度をとると殺所もあります。その一つであるギンステーン (Ginsten) と殺所のベンクト=ヨーラン・ヨーランソン (Bengt-Göran Göransson) 所長は、「私たちには何も隠すものなどありません。豚は2、3頭ごとに気絶させます。鳴きも苦しみもしません。これよりよい方法はないと思います」と豚の殺し方について説明しています。(Göteborgsposten紙 01/01/09)

火葬場の熱を有効利用

火葬場から発生するガスは1,000 にまで上昇します。ガスは浄化のために150 まで温度を下げる必要があります。水を利用して冷やすとお湯ができます。その余剰熱は有効利用して暖房に使うべきでしょうか。各自治体により考えが別れています。

ヨーテボリ市にあるクヴィーベル (Kviberg) 墓地では、火葬場の余剰熱を葬儀に使われるチャペルと墓地事務所の暖房に使用しています。余剰熱が足りない時は、電気暖房機が自動的に付くようになっています。

実はもっと有効的な利用方法がありました。ヨーテボリ市の地域暖房を供給しているヨーテボリ・エネルギー (Göteborg Energi) 公社と当地域の教会が提携し、火葬場の余剰熱を有効利用するという計画案が3年前に持ちあがりました。公社はガス冷却用の冷水を火葬場に送り、余剰熱を引き取るという案でしたが、公社は暖房を利用している住民の気持ちに配慮して計画を見送りました。その代わりに教会は巨大な換気扇に巨額の投資をし、余剰熱を利用せずに無駄にすることとなりました。墓地内の建物の暖房にのみ有効利用しています。

ボロース (Borås) 市やシェベデ (Skövde) 市は別の考え方をしています。有効利用は自然な循環であるとし、余剰熱を地域暖房システムに送り込んでいます。(Göteborgsposten紙 01/01/04)

火葬場から出る水銀はどこへ

火葬場の水銀汚染は深刻な問題です。歯の詰め物に用いられるアマルガムには水銀が含まれており、ガス化され環境を汚染します。スウェーデンでは、年間約880 Kgの水銀が環境中に拡散されており、このうち火葬場は約250 Kgを占める最大の排出源です。

94年7月1日以来、火葬場は環境に有害な事業として指定されているので、新たな火葬場の事業開始には許可が必要です。99年1月に施行された環境法典によると、環境に有害なすべての事業は許可が必要で、施行以前に事業を開始した事業者は04年12月31日までに許可の申請をしなければなりません。火葬場の許可には排出規制が含まれており、水銀の90%を回収する義務があります。

去年3月14日、環境党のグドルン・リンドヴァル (Gudrun Lindvall) 議員がこの問題についてシエル・ラーション (Kjell Larsson) 環境相に議員質問をしました。火葬場では、水銀の回収率が高いとされる炭素フィルターが使われています。水銀が炭素フィルターに集積すれば、このフィルターを有害廃棄物として安全な管理ができるというものです。しかしリンドヴァル議員によると、水銀はフィルターにほとんど集積せず、煙突からも排気されていないことが最近の実験で明らかにされました。水銀は火葬場内部に残っているのか、どこに行っているのかは不明なままです。環境相はその事実を認めました。

リンドヴァル議員は、巨額の投資が必要な炭素フィルターの代替技術として、小さな会社の開発した「セレン・アンプル」の使用を提案しました。セレンは、水銀と化学反応をし、セレン化水銀 (HgSe) という非常に安定した化合物を形成します。セレンの入った入れ物 (アンプル) を火葬時に棺桶の上に置くと、ガス化された水銀がセレンと結合し、ガスを冷やす冷却設備の内部に集積し、回収しやすくなります。

環境相は、問題を認めながらも、行政の役割は排出基準を決め、厳守を監視し、使用すべき適正技術のアドバイスにとどめるべきで、特定の技術の導入は指定できないと答えました。(議会Rixlexデータベースにある00/02/24の議員質問、00/03/14の答弁速記録、その他) レーナ・リンダグ